

高田信良著

『宗教の教学——親鸞のまねび——』

法藏館 二〇〇四年五月三〇日刊
A5判 二八二頁 三八〇〇円＋税

竹村 牧男

地球的にも地域的にも多元化した世界にあって、近年、宗教間対話が切実の課題となり、その実践も多くなされてきている。どちらかといえば、キリスト教にその自覚が深いのに対し、仏教ではこれに大いに取り組む潮流が形成されているとはかならずしも言い難いかもしれない。そうした中であって、著者・高田信良氏（龍谷大学教授）は、バーゼル大学・ミュンヘン大学での学究の経験をふまえ、仏教の側からこの問題に精力的に取り組んでいる貴重なお一人である。

本書は、前著『見える真宗・見えない真宗』（一九九三年）以後に書き記したものを主としながら、加筆修正しつつ再構成したものという。すでにその前著において、「浄土教における宗教の神学」の問題などを論じていた。本書においても、今日の宗教間対話の流行の中、関心は多元主義の成否にはあまりなく、もっぱら「宗教の神学」(Theology of religions, Theologie der Religionen, Theologie der Religion)を、仏教の側からどう展開し、確立するかに関心が集中しているように

ある。それは、すでに親鸞が、仏教の諸宗派の共存する状況の中で、弥陀の本願による救いを選び取った、その先蹤にならいつつ、その営みを今日の宗教多元状況の中で遂行したいということなのであろう。ただ、親鸞においては、末法に生きる自己の自覚が切実であった。ところが、現代にその感覚は乏しく、また親鸞教学を学ぶ際、すでに末法の自覚は折込済みで、今日の強烈な自己認識に導入しがたいという問題もある。そうした状況をも考察しつつ、仏教あるいは真宗に基づく「諸宗教の神学」（仏教的に「諸宗教の教学」とも言われる）を構築しようという意欲が本書を貫いている。

ここで、本書の目次をあげておこう。

まえがき

第一章 現代における〈親鸞のまねび〉

第二章 現代における宗教

第三章 宗教と文化

——「キリスト教はヨーロッパの宗教」か？

第四章 諸宗教の神学（教学）

——宗教への問い、宗教との対話

第五章 仏教（真宗）における〈エキメニズム〉

第六章 仏教・キリスト教と宗教

第七章 浄土真宗における「祈り／瞑想」という事柄

第八章 宗教の出会い——他者の発見、自己の発見

第九章 「教行証」と「教行信証」と「正像末」

第十章 浄土門仏教における「宗教の教学」としての「真仮

書評と紹介

偽」論

すでに本書の概要についてふれておいたが、以下もう一度やや詳しく、本書全般の内容を、適宜紹介しておこう。

著者は、現代の状況を、宗教の多元化の状況と見ているが、それは、異なる多くの宗教の共存のみでなく、この多元化状況に自らを問う宗教とそのことに関心を持たない宗教との共存、さらには信仰する者としなない者との共存などの実情を見ている。たとえば著者は、「つまり、キリスト教の場合のように「神」概念と「キリスト」(救済)概念が統合されることにおいて宗教的真理が実現される、というような構造を有しているわけではない。少なからぬ宗教は、自宗教と他宗教の真理性の〈統合的理解〉に関心をもっていない。他との対比において、自宗教を「特殊な存在」とも理解していない。筆者が、現代における〈宗教的多元状況〉として理解するのは、そのような理解をする宗教と、そのような理解をしない宗教とが、現に、出会っている、という多元性である」(九二頁)と言う。そうした中で、キリスト教は、諸宗教の神学を展開してきた。その営みは、異なる宗教の共存状況の中で、自己の真理性を弁証する営みであるとする。「諸宗教の教学」は、宗教学と神学(教学)とが交錯するところでの営みである。他宗教と出会うところで自宗教が一つの宗教であることを発見する。そのような〈宗教多元状況〉において「宗教」を理解する視点を取り入れることを通して、自宗教の「信」を弁証(自己理解)しようとする営みが「諸宗教の神学(教学)」である」(八〇頁)。「とこ

ろが、「エクメーネ運動」や「他宗教との対話」の関心は、自らの真理要求の「外」にある他者の存在を自らの真理契機としていこうとするところに成立する議論である」(八九―九〇頁)。

そうした今日のキリスト教の時代に適応しようとする努力の事例を、著者は豊かに紹介している。特にジョン・B・カブ・Jr.の「キリストとしてのアミダ」の議論について著者の応答を紹介し、あるいはフリッツ・ブーリの「ブッダーキリスト」説の立場への言及もあって興味深い。

しかし一方、イエスを中心とし、啓示の宗教であるキリスト教と、ダルマを中心とし、覚の宗教である仏教とは、事情が異なることも再三述べている。そして「諸宗教の教学」の営みへの動機は、仏教には存在しがたいことを指摘する。にもかかわらず、この問題は今日の宗教多元状況の中にあつて、やはり重要な課題と考えられたのであろう。あるいは親鸞自身がまさにその営みをしていたとの発見によるのであろうか。終りほどの数章はそこへと収斂されて、真宗の信に基づく立場を中心とし、その真理性の弁証に努めようとしていく。すなわち、親鸞の「真偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡する」「聖道・浄土の真偽を顕開して、邪偽・異執の外教を教誡す」の「真・偽・偽」論に、現代に生きる我々自身の「諸宗教の教学」を見出そうとする。ただしそれは、「時・機・法」によって構成されるものであり、その中、末法の「時」の現代における切実な自覚をどう取り戻すかを課題としてさらに追求しなければならぬことを訴えている。

このほかにも、親鸞の教えの社会的受肉としての教団の問題、人間の死の問題等も論じられており、話題は多彩である。しかし本書の要点を概括すれば、以上のような趣旨にまとめられるかと思われる。

とにかく仏教の側から、自らの信仰に立ちつつ、宗教多元状況に応答しようと努力している著者の姿勢は、まことに貴重なものと思う。また、現代の宗教間対話の現状についての豊富な紹介および自らの実践の一端の報告は、この問題を考えようとする同学の士を大いに啓発することであろう。その大いなるお仕事の積極的評価を前提として、以下、本書に触発された私自身の勝手な思いをいささか記してみたい。

まず、「諸宗教の神学」の定義とでもいうことの問題である。それは、確かに諸宗教の共存状況に対して、自宗教の真理性を弁証しようとするものでもあるのであろう。しかし、諸宗教の多元状況に対したとき、われわれはどのように対すべきなのであろうか。初めから、自宗教の真理性を弁証しようという態度で臨むのが当然なのであろうか。ことは真理性にかかわる問題である。宗教多元状況に対して、自宗教の真理性すら疑問視し、解体することをも厭わずに、「宗教の真理」を尋ね、そこから自宗教の真理性を照射し、変革すべきは変革するということもありうるのではなからうか。実際、「諸宗教の神学」を追究していく人の中には、あらかじめ自己の宗教の真理性を弁証しようとする者ばかりでもないのではなからうか。

次に、啓示のキリスト教と覚の仏教とは異なっており、キリ

スト教の「諸宗教の神学」という営為に対する高い動機に対して、仏教にその動機はないということの問題である。初めに、キリスト教が啓示の宗教とのみも言い切れず、覚の宗教でもありうることは、久松真一・八木誠一の対話の中に明かされたことである。一方、仏教も、十二分教（いわば仏教の聖なる言語のすべて）は「法界等流」とも言われ、真理の世界から流れ出たものであるのだから、一種、啓示の宗教とも言えるのではないかと私は思っている。特に大乘仏教、とりわけ浄土教は、名号（聞名・称名）と信とに救いがあると説く点で、啓示的とはいえないであろうか。著者は概してキリスト教と仏教との差異を強調するが、私は、日本その他において積み重ねられてきた両者の対話の成果をもう少し顧慮して考えていきたい。

次に、仏教が宗教間対話等に困惑を覚え、積極的でないという、この辺は仏教自身も考えていかなければならないことであろう。実は他の多宗教に対する自己の真理性の弁証ということなら、それこそ仏教は昔からこのことに努めてきた。すなわち、教相判釈の営みである。それは、時代の進展とともに、その時代その時代の課題に深く応えようとする中で行われてきたのであった。天台、華嚴、空海、法然等、みなその時代の眼にしうるあらゆる思想の共存状況の中で、それらがどのように位置付けられるか考察してきたのである。現代は検討の対象とすべき思想がさらに広がり、増えたのであるから、仏教としても、もう一度それらと対決し、自覚的にそれらを位置付け、自らの立場を再確認すべきであろう。空海が、当時、目にしえた儒教・道教・バラモン教・仏教を対比して自宗教の真理性と他

書評と紹介

宗教の一分の（かつ全分の）真理性を跡づけたように、現代においておよそ目にしうるキリスト教・イスラーム・仏教等をも一度、対比させ、対話し、総合的な体系に組織するという課題は、実は今日の仏教にもとよりつきつけられている課題であることを思わなければならない。したがって、過去の祖師方のその営為を安易に採用するのではなく、むしろあらためて諸宗教を根本的に吟味・検討して、実際に「諸宗教の教学」を行ってみなければならない。

と同時に、今日の多元化状況にあつて、現実的に平和・共生の実現した社会を建立していくにあつて、たとえ自宗教が真理性を担っているとしても、その自宗教になんらか独善性がつきまとうとしたなら、それをどのように克服していくかは、やはり重要な課題ではないであろうか。そのためには必ずしも宗教多元主義に立たなければならないかどうかとも研究課題であるが、確かに多元主義は真剣に検討すべきひとつの主題ではある。宗教多元主義を唱えたヒックは、キリスト教の内にあつて、そのキリスト教のまさに核心部分である「イエスは神の子である」との命題を解体してまで、多元社会の課題に応えようとしたのである。はたして仏教には、自らを解体してでも時代に応えようとする姿勢や覚悟はあるのだろうか。（もつとも多元主義は唯一の神的存在を想定するヒックのそればかりでもない。まさに通底したい真理性をおのおの所有していると見る多元主義もあるという。）

そこで問題となるのは、真宗が自らを真とし、他を仮・偽とした、その教えをどう現代において受け止めていくかである。

それは、他宗教を斥けるのが目的ではなく、自宗教の真実性の開頭を目的としていると言つても、その独善性を離れえているとは私には思えない。もちろん、真実の宗教が明かす事理は、決してあいまいにされてはならない。しかし真宗のみが真であるというとき、それはどのような意味においてなのであるか。弥陀の大悲の啓示と救いとは、六字名号以外にはありえないというのか、他の形もありうるというのか。他の形もありうるとしたら、それはキリスト教のある一派に実際に見出されることはありえるのか、あるいはありえないのか。キリスト教もまた、もはや一つの立場でくくれるものではないかと思う。私は、浄土教の歴史は、法蔵菩薩の神話の非神話化の歴史であつたと思うのであるが、親鸞の解釈を、さらに現代の境位において進めていくことが望まれていよう。

そのような形で、実は今日においては、広範な諸宗教を詳細に検討したうえで、諸宗教に真・仮・偽がどのように言えるのか、究明してみなければならない。そこでは、自宗教の教祖の言葉や立場に安易に拠りかかるのではない、真剣な検討が求められるはずである。西田幾多郎は、独自の哲学的考察から、禅と真宗とキリスト教に一貫する絶対者と自己との関係の論理構造を提示したのであつた。滝沢克己は、イエスが示した人間の原点を、親鸞の言葉の中にも見出していた。諸宗教の神学という以上は、本当に諸宗教を神学的に、宗教哲学的に、詳しく検討してみなければならないだろう。

さらに、その上で、なおかつ真宗のみが真だとして、他はすべて「教誡」の対象なのであるか。それでも他宗教にも豊か

な真理性があることを見出し、あるいは自らにやはり足りない点があることも認めて、他とあい携えて人類の真の目覚め・救いと福祉等に貢献する道をどこまでも模索していく必要もまた、あるのではなからうか。

著者の、時代に真摯に向き合う姿勢と粘り強い考察に敬意を覚えつつ、だからこその以上のような思いをとどめえずにいる。それは、すべて本書の次の課題であり、本書自身にこのことを求めるべきでないことは十分に承知しているつもりである。また、今、私が述べたようなことは、一人の学者のよくなしうるところでもないであろう。今後、仏教側が、協働して、著者が追求しているような課題に立ち向かってほしいと思うものである。

大貫隆・島蘭進・高橋義人・村上陽一郎編

『グノーシス 陰の精神史』

岩波書店 二〇〇一年九月二六日刊
A 5判 三八七頁 六八〇〇円＋税

同編

『グノーシス 異端と近代』

岩波書店 二〇〇一年一月二八日刊
A 5判 三八六頁 六八〇〇円＋税

中 西 恭 子

はじめに

本書は古代グノーシス主義から現代の新霊性運動に至る「グノーシス主義」的現象の諸相を論じる「グノーシス百科」として構想されている。古代・中世編である『陰の精神史』の主題は近世以前の西洋宗教思想史における「グノーシス主義」の変容であり、ユダヤ・キリスト教的伝統の周縁から正統主義に異議申し立てを行った古代グノーシス主義と中世の二元論的異端にみられる現世否定的救済論の動向に加えて、初期近世にスコラ主義的世界観に抗して超越的な「全体知」を介した信仰と経験的世界観の統合を求めるエゾテリックな思想と結社を扱う。